

この学校にわたしたち

2022. 07. 8 N021

子どもを信じぬく勇氣



普段、子どもたちと話をしている、子どもの感覚や表現に感心させられることがしばしばあります。

「大人と子どもの能力の違いとは?」。こう問われたら私たちはどう答えるのでしょうか?もちろん、いろいろな答え方があると思います。桑原 知子さんと並んで私が大好きな臨床心理士の網谷由香利さんは答えています。「大人は言葉中心で意思疎通するが、子どもは言葉よりも感覚を重視する」そして「時には大人以上に本質を鋭く理解する」と。自分の思いをすらすらと正確に言葉で表現できる子どもは少ないです。

しかし、表現できないからといって「分かっていない」わけではありません。時と場合によっては、子どもは大人以上に鋭敏な場合もあります。すべての子どもは可能性に満ちています。例え、今、勉強ができなくても、運動ができなくても、将来、大きな花を咲か

せるための栄養をじっくりと蓄えていることでしょう。

子どもの秘めた力を信じられるかどうかで、親子関係は随分と変わるでしょう。信じればこそ、できることは子どもに任せ、自主性を伸ばすことができます。どこまで子どもに任せるのか、どこで口を出すのかは個々によっても違いますから一概には言えないでしょう。

反対に、子どもを信じられず、子どもの幸せのためにこうすることが一番と強く決めすぎることによって子どもの行動を過度に干渉し、かえって伸びる芽を摘むことにもなりかねません。今は親の言うことを聞いていたとしても子どもの心が成長してきたときにこれまで我慢してきたことに耐え切れなくなって爆発したり、恨んだりということになってしまっははいけません。

「夜回り先生」で有名な水谷修さんが、今も大切にしている言葉は「ちゃんと前を向いて頑張れる子だと信じています」だそうです。荒れていた自身の思春期時代に学校に呼び出されたお母さんが、教員に言った言葉だそうです。水谷さんのお母さんのこの言葉は簡単に言えるものではありません。何があっても子どもの力を信じ抜く、そのお母さんの姿勢が、水谷さんの大きな励みになったといひます。「木を植える場合、大風が吹いたとしても、強い支えがあれば倒れない」と。「信じる」ことこそ、大樹を支え育てる最大の滋養となるのです。親としてはわが子を、教師としてはわが学級の児童をどこまでもしっかりと真剣に見ていないとこの支えにはなることはできません。子育てに完璧はありませんし、子育てにおいて完璧を目指すことは不要だと思います。しかしながら、時々、自分はどうか…と高速道路のサービスエリアに立ち寄るような気持ちで振り返ることは大切ではないでしょうか。

子どもたちは創造性のかたまり

先日、放課後お迎えを待機していた1年生4名の児童がいました。最初、宿題をしていましたが、宿題を済ませたあと、それぞれ教室にあったおもちゃで遊び始めました。ある子はわなげの輪を友だちとけり始め、輪がものに当たったらゲットするという暗黙のルールを2人で瞬時に決め、楽しんでいました。また、別の子は上下に動く椅子に小さい人形をいっぱい積み、最後まで残ったら勝ちというルールで遊び始めていました。「子どもは意欲がない…」と聞くことがあります。私はそうではないと思っています。もし、大人が「この輪はけるものじゃないでしょ」と言ってしまうと子どもたちは創造することをやめてしまうことになるでしょう。もちろん、場面によって注意や制止させなければならぬことも多いでしょう。でも、本当に制止することが必要なのか、見守る場面なのか、判断は難しいですが考えてから行動することも必要だと思いました。